＜論文＞

高齢期の被援助志向性に影響を与えるライフイベントは何か
―SCATによる内容分析を用いた検討から―

東京都健康長寿医療センター研究所
高橋 知也
九州産業大学
小池 高史
横浜国立大学
安藤 孝敏

What is the life event that affects the help-seeking preferences among the elderly?
– From the result of content analysis conducted by Steps for Coding and Theorization(SCAT) –

Tomoya TAKAHASHI
Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology
Takashi KOIKE
Kyushu Sangyo University
Takatoshi ANDO
Yokohama National University

要旨

独居高齢者の「援助を受けること」に対する認知的枠組み（以下、被援助志向性）を質的に検討することにより、被援助志向性に影響を与えるライフイベントを明らかにすることを目的として、6 名を対象に半構造化インタビュー調査を実施した。インタビューデータから Steps for Coding and Theorization（SCAT）による理論記述を行った結果、現在における被援助志向性がそれまでに個々人が経験してきたライフイベントに影響されることが示唆された。具体的には、(1) 援助職や小売業といった職業経験が肯定的、あるいは否定的な被援助志向性を形成する要因となり得ることや、(2) 身近な人との互助性を伴うつながりが肯定的な被援助志向性を形成する要因となり得ること、(3) 自身や家族の健康、あるいは経済上の変化に伴う公的サービス（介護サービスや生活保護、求職支援など）の利用経験が被援助志向性を形成する要因となり得ることなどが示された。

SUMMARY

A semi-structured interview survey was conducted for 6 older adults to clarify what life events would influence the help-seeking preferences among older adults living alone. As a result of the theoretical description by Steps for Coding and Theorization (SCAT) from the interview data, it was suggested that the life events they have experienced so far influence to their help-seeking preferences at present. In particular, subjects regarded job experiences, a connection with mutual aid with familiar persons, or experiences of using public services as either positive or negative factors affecting their help-seeking preferences.

1 はじめに

1.1 高齢期のライフイベントと被援助志向性

健康長寿を目指す多様かつ優れたサービスの整備が進められつつある一方で、周囲からの援助を拒否する高齢者の存在が認知されつつある。援助を拒否されたために適切な介入の時機を失ってしまうことで、プライマリケアの遅れによる心身機能の低下や、最終的に必要となる医療費等の増大を招くことが危惧される。

周囲からの援助を受けるかどうかという決定には、「援助を受けることに対する認知的枠組み」、すなわち被援助志向性（水野・石隈， 1999、田村・石隈，2006）が関連すると考えられる。Takahashi et al.（2017）は、高齢者の被援助志向性を「援助に対する欲求」と「援助に対する抵抗感」の 2 つの側面から測定する尺度を作成するとともに、性別などのデモグラフィック変数のほか、暮らし向きや身体能力の低下が被援助志向性の関連要因となっていることを報告している。このことは、高齢者の被援助志向性が公的なサービスを含めたセーフティネットの適切な利用、あるいは身体機能の維持向上などを目指す介入によって変化する可能性を示していると考えられる。周囲からの援助を拒否する高齢者への対応については、これまでも小川ら（2009）などにより専門職によるアウトリーチの難しさなどの課題が挙げられてきた。そのような中、将来的に被援助志向性の低さから援助拒否に至るリスクのある高齢者を早期に把握し、適切な介入へと繋ぐためのツールの開発が進められていくにつれ、従来アウトリーチが叶わなかった高齢者にも、専門職などによる支援が行き届くようになる可能性がでてきたといえよう。

ただ一方で、援助に対する欲求の高低や援助に対

する抵抗感の強弱について考える際は、上述の諸変数以外にも「現在までに経験した出来事や、それに基づく考え方および行動原理」についても検討範囲を拡大する必要があると推察される。同様に、生活してきた環境もより細かく考慮する必要があろう。特に高齢期には、Holmes & Rahe(1967) が大きなストレスを伴うライフイベントとして挙げる「配偶者および近親者の死」や「身体疾患」、あるいは「退職」といった大きなライフイベントがしばしば生じるため、それらによる被援助志向性への何らかの影響が予想される。調査研究を通じて被援助志向性に影響をもたらす具体的なライフイベントの特徴が明らかになれば、その特徴を考慮した新たなチェックリスト作成の足掛かりとなり得るほか、専門職や周囲の人々による早期介入の方略を考える示唆にも繋がるものと考えられる。

1.2 先行研究の概観と本研究の意義、採用するアプローチ

我が国における先行研究においては、被援助志向性が重要となる場面として「大学生による学生相談室の利用」(高野・宇留田，2002、高野ら，2008) や「育児における悩み事の相談場面」(越谷，2012、本田ら，2009)、あるいは「ヒューマン・サービスに従事する専門職者の問題解決場面」(田村・石隈，2001) といったものが想定されている。特に心理臨床や学校教育といった領域では、多様な属性（中学生や大学生、アジア系留学生、中学校教師など）における被援助志向性に焦点を当てた論文（水野・石隈，2001、田村・石隈，2002、木村・水野，2004、水野ら，2009）や、特定領域におけるレビュー論文（水野・石隈，1999、木村，2014）といった形で一定数の報告がなされている。

一方でこうした領域とは「本質的な違い」（水野・石隈，1999）を持つ、援助者や援助内容およびそれらが生じる場面を特定しない、いわば「日常生活における被援助志向性」を扱った研究の蓄積は相対的に乏しい状況にある。とりわけ高齢者の日常生活における被援助志向性や援助要請行動について扱った先行研究は、我が国においては「同じ人物の持つ援助行動と被援助行動の関連」に関する研究（高木・妹尾，2006）のほか、「高齢者が援助要請先として想定する相手の属性」に関する研究（高橋ら，2015)、「高齢者の被援助志向性を測定する尺度の作成やその関連要因の検討」（安藤ら，2017）などに留まっており、ライフイベントと被援助志向性との関連について具体的に検討した報告は確認できなかった。国外でも、高齢者の被援助志向性について検討を行った論文は複数発表されている（Stoller & Culter, 1993、Waxman et. al., 2007、Husaini et. al., 2008）が、国内と同様、ライフイベントと被援助志向性との関連について検討した報告は確認できなかった。

しかし、被援助志向性がそれまでの社会生活やライフイベントを通じて得た経験の蓄積による影響を受けて形成されることは容易に予測できよう。また既に述べた通り、高齢期には時にストレスを伴う多様なライフイベントが発生するものと考えられ、中にはそれまでに形成されてきた被援助志向性を変化させ得るほど影響力の大きなものが存在する可能性も考えられる。そのようなライフイベントを具体的に明らかにすることは高齢期の被援助志向性について検討を行う上で重要な意義を持つと考えられるが、当時の状況やもたらされた影響を明らかにするためには、個人をより深く掘り下げる質的な分析が有効であると考えられた。

1.3 研究の目的

高齢者に対する「援助を受けること」に関するインタビュー調査を通じて得られた内容を質的に検討することで、高齢期における被援助志向性に影響を与えるライフイベントをより具体的に明らかにすることを目的とした。

2. 方法

2.1. 調査対象者

調査対象者の選定にあたっては、事前に実施した別の質問紙調査（回答者 671 名【男性 329 名、女性 342 名。平均年齢 72.1 歳、SD:4.3】）（安藤ら，2016）において使用した調査用紙の末尾に設けた「インタビュー調査に対する協力依頼」に応じた独居高齢者のうち、高齢者の援助を求めることや受けることについての考え方を測定する尺度である「高齢者用被援助志向性尺度」における下位尺度「援助に対

図 1　インタビュー対象者の選定基準と方法

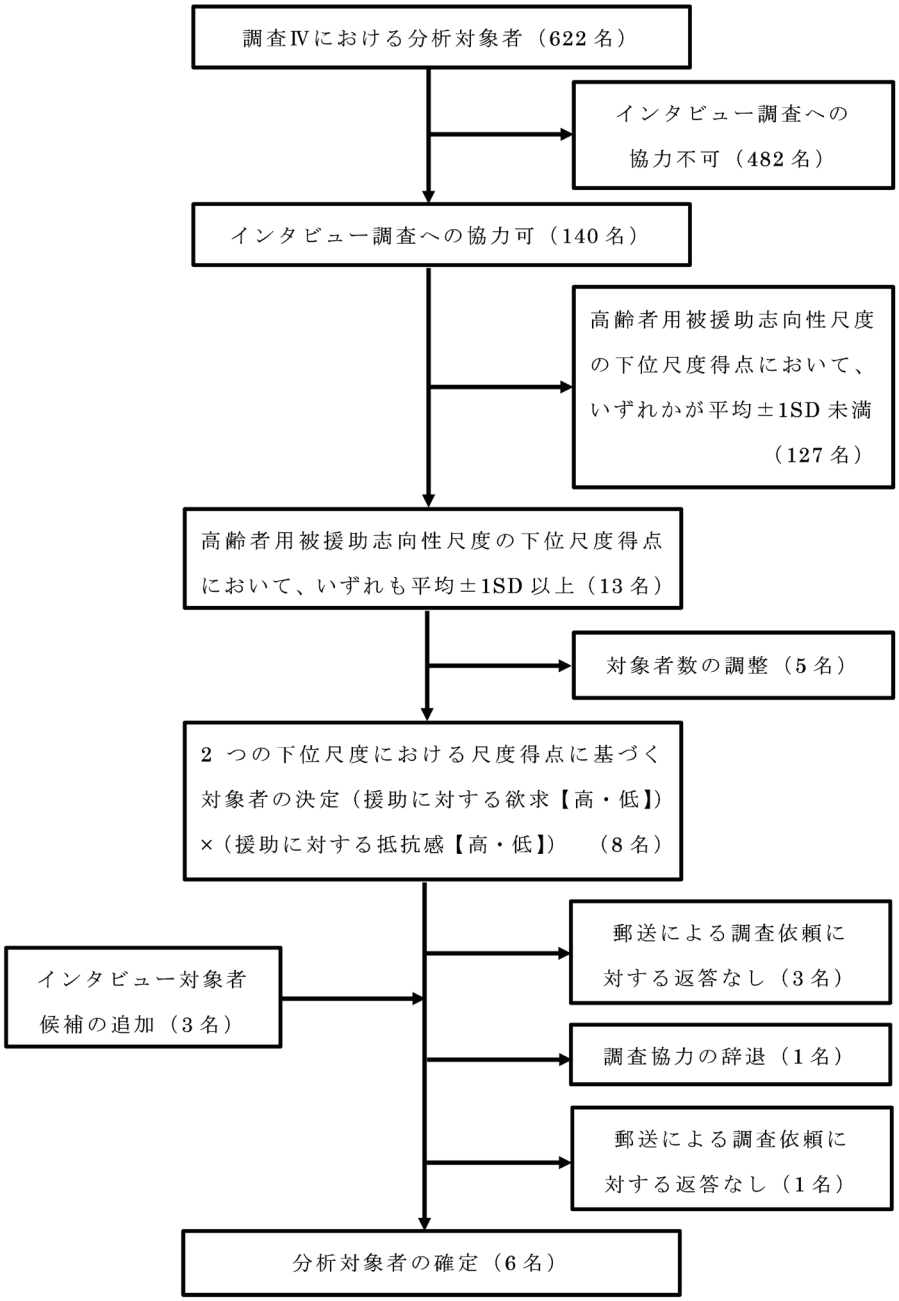

図1　インタビュー対象者の選定基準と方法

する欲求」および「援助に対する抵抗感」の全ての項目に回答し、かついずれの下位尺度についても尺度得点が平均± 1SD 以上高い、もしくは低い得点であった者 13 名のうち 8 名（男性 4 名、女性 4 名）をインタビュー対象者候補とした（図 1）。すなわち、インタビュー候補者は尺度得点の様子から、「援助に対する欲求」（高群･低群）と「援助に対する抵抗感」（高群・低群）の掛け合わせにより想定される 4 つのタイプ（欲求：高・低群×抵抗感：高・低群）のいずれかに該当する者であった。

その後候補者に対し、郵送によるインタビュー調査に対する協力の可否を確認し、調査依頼に応じた 5 名を分析対象者（A、B、C、D、E）とした。一方、インタビュー対象者候補のうち、【援助に対する欲求が低く、抵抗感が強い女性】と【援助に対する欲求が強く、抵抗感が強い男性】、【援助に対する欲求が強く、抵抗感が強い男性】からは返答を得られなかったため、インタビュー対象者候補 3 名を追加して同

表1　分析対象者の特徴

調査協力者	性別	年齢	録音時間（分）	同居者	最終学歴	暮らし向き（5件法）	健康状態（4件法）	援助に対する欲求（尺度得点高・低群）	援助に対する抵抗感（尺度得点高・低群）
A	男	73	60	無し	大学	どちらともいえない	まあ良い	低	低
B	女	68	49	無し	高校	とても余裕がある	良い	低	低
C	男	72	53	無し	高校	どちらともいえない	良い	低	高
D	男	74	73	無し	大学	どちらともいえない	まあ良い	高	低
E	女	65	44	無し	大学	やや苦しい	良い	高	低
F	男	74	46	無し	高校	どちらともいえない	まあ良い	高	高

様に郵送によるインタビュー調査に対する協力を依頼した。その結果、このうちの1名が調査依頼に応じたため、分析対象者（F）として追加した。その他2名のうち1名は調査協力を辞退し、1名からは返答を得られなかったため、最終的に6名（男性4名、女性2名）を分析対象者とした（表1）。

2.2. 調査方法

インタビューは個別面接とし、調査に先んじて作成したインタビューガイドを用いた半構造化面接の手法を用いて行った。なお、インタビューを行うに当たっては、事前に回答した質問紙調査の結果を用意し、必要に応じてこれらも参照しながら質問を行った。

インタビューの内容はICレコーダーを用いて全て録音し、逐語録データを作成した。なお録音時間は、平均で54.2分であった。

2.3. 調査項目

調査項目は研究目的に沿う形で検討し、①周囲の状況などについて（別居家族の有無、友人との付き合い方など）、②印象に残っている、援助を受けた経験、③他者から援助を受けるということについての3点としたが、内容を限定することなく自由に語ってもらうこととした。なおこれらの調査項目は、老年学を専攻する研究者との検討を行い設定した。

2.4. 分析方法

インタビューの分析は、大谷（2008, 2011）によるSCAT(Steps for Coding and Theorization)による定性的手法を採用した。SCATは逐語化した音声データに対して明確な4つのステップによるコーディングを行うことにより、構成概念の抽出およびストーリーラインの生成、さらにはストーリーラインを断片化することによる理論記述を試みる分析手法である。ここでの理論とは、「分析データにおいて言えること」を指す。

SCATは手続きを明確に示すことで分析過程の省察可能性と反証可能性（大谷，2008）を担保している点において科学的な分析手法であることや、常に文脈を意識して振り返りを繰り返しながらコーディングするという直感的に理解しやすい手法であることに鑑み、これを採用することとした。SCATは4つのステップによるコーディング（①行ごとに着目すべきであると考えられる語句を書き出す、②書き出した

図2　SCATによる4ステップコーディングの手順

表 2 SCAT によるコーディングの一例（分析対象者 B）

番号	発話者	テクスト	<1>テクスト中の注目すべき語句	<2>テクスト中の語句の言いかえ	<3>左を説明するような テクスト外の概念	<4>テーマ・構成概念 （前後や全体の文脈を考慮して）	<5>疑問・課題
1	Q	まず、お仕事をされていらっしゃるということで、お答えいただいているんですが。どのくらいお仕事をされていますか。					
2	T	10代の頃からずっと、まあ職種は違っているけれどもね。自分で今もここのおうちで飲食業をやっているのよ。	10代の頃から 今もここのおうちで飲食業をやっている	10代の頃から今まで飲食業をやってきた	現在までの飲食業の経験	今日まで飲食業を続けてきた	
3	T	だけど、もう今年でやめようかと思って皆さんに言って、もう年も年だしね。	今年でやめようかと思って 年も年だしね	今年で廃業の予定 年齢的な都合もある	年齢の面からも、今年で廃業を決めている	今年での廃業を決めている	
4	Q	あら、そんなもったいない。					
5	T	かえって気楽ですよ、1人だから。みんな自分で決めればいいんだから。まあ今までも自分でそうしてきたから。きょうだいやなんかいっぱいいるけれども、みんな今までも、ずっと自分で決めてきたから、ずっと決めてきたから。	気楽 みんな自分で決めればいい ずっと自分で決めてきた	気楽でいい 物事は、ずっと自分ひとりで決めてきた	一人は気楽で良い 他人に頼らず、自己決定を貫いてきた	ひとり暮らしは気楽で良い 自己決定を重視してきた	
6	Q	お1人暮らしをずっと続けられてきたということですか。					
7	T	今まで、ここに仏さんがあるとおり、大親友と2人で店をやっていたんですよ。でも、もう何年前？　15年ぐらい前に病気で、もう店に出なくなって。若い頃から、ずっと一緒にやっていたんです。でも3年前に亡くなっちゃって、その間、看病をしながら店をやっていたんだけれども。	大親友 2人で店をやっていた 若い頃から、ずっと一緒 3年前に亡くなっちゃって	パートナーとのお店の経営 3年前に死別した	飲食業を一緒に続けてきた パートナーとの死別	共に働いてきたパートナーとの死別	
8	Q	3年前ですか。					
9	T	そうなのよ。それまでは、だから。					
10	Q	お2人で。					
11	T	病気ながらいたから、まださみしくなかったけれども、やっぱり1人はさみしいけれども、まあしょうがないわね。女の人だから別に亭主じゃないのよ、そうだけど、やっぱり誰かがいるのと、いないのとじゃ。	1人はさみしい まあしょうがない	先立たれて寂しい 時の流れとして諦めている	先立たれた寂しさ	先立たれてしまった寂しさ	
12	T	隣に姉が住んでいるんですが、やっぱり、それでも姉は姉のうちでしょう、だから、あんまり行ったり来たりはしないの。年が離れた八十幾つだから。まあ行けばいるから、あれなんですけれども。	隣に姉が住んでいる 年が離れた八十幾つ	隣に住む姉の存在 80代の年上	隣に住む姉との付かず離れずな関係	親族と付かず離れずな関係を維持している	
（中略）							
83	T	本当に縁だと思いますよ。だから私の人生はありがたいことばっかり。一生懸命に生きていれば、誰かしらが見ていてくれる。本当にそう。	本当に縁だと思います 私の人生はありがたいことばっかり	私の人生は、人の縁に恵まれて、ありがたいことばかり	周囲への感謝	周囲の人々への強い感謝	
84	Q	そういうものですよね。					

ストーリーライン（現時点で言えること）	今日まで飲食業（水商売）を続けてきたが、今年での廃業を決めている。共に働いてきたパートナーとの死別を経験しており、現在はフラダンスなどの趣味を通じた友人との繋がりや近所付き合い、親族との付かず離れずな関係を維持している。援助欲求は低く、施設利用も選択肢に入れているようである。その背景には普段交流のない親族には頼れない、迷惑をかけたくないという思いや、単純に子どもがいないということを挙げている。また、援助要請の対象は友人か近くに住む姉を想定しており、日頃から互助の関係を築いている。これまでに大きな病気はなく、自己決定を重視してきたこともあり、被援助経験に乏しく援助に対する欲求そのものは低いが、パートナーを介護した経験や介護サービスの実情を近くで見てきた経験から、援助に対する抵抗感はさほどない様子である。日頃より周囲から手助けを受ける機会が多いが、本当に親友と呼べる人は少なく、旧来からの信頼できる相手との付き合いを大切にしていると述べている。また、やはりそのような相手であっても自分の家庭などの事情を優先してほしいと考えている。なおパートナーの介護を経験する中で過剰ともいえる福祉サービスに対する懸念も感じており、併せて次の世代が背負う負担に対する懸念にも言及している。今の生活に不満などはなく、周囲の人々に強い感謝の気持ちを持っており、今後も充実した人間関係に支えられながら生活していきたいと考えている。
理論記述	・身近な人の介護経験が、自身の援助に対する抵抗感を低減させる。 ・迷惑を掛けたくないという考えが援助に対する欲求を低める。 ・被援助経験の乏しさは、援助に対する欲求そのものを低める。 ・周囲との互助関係が、援助に対する抵抗感を低減させる。
さらに追究すべき点・課題	

注）コーディングの工程表は、「scat のための Excel フォーム」（http://www.educa.nagoyau.ac.jp/~otani/scat/scatform1.xls）を使用した。

語を別の言葉で言い換えることで、個別的な事象を一般化する、③言い換えた語を説明できるような概念や説明を提示する、④①～③を基に、行ごとにテーマや構成概念を書き出す）を基本としているが、本研究でもこの手法に則り、図2の手順によるコーディング作業を行った（コーディングの一例を表2に示す）。

その後、得られた結果について質問紙調査における高齢者用被援助志向性尺度の尺度得点の結果との整合性を個別に検討することで、新たに作成した尺度の妥当性を検討するとともに、分析対象者6名全員のSCATによる分析結果を相互に比較した。

2.5. 調査に係る倫理的配慮

調査協力を依頼するにあたっては、事前に研究への参加依頼書を送付した上で、郵送による承諾書を返送した者にのみ改めて依頼を行った。依頼文書には調査の主旨の説明や個人情報およびプライバシーの保護に関する説明、研究協力が自由意思に基づく旨を記載し、その返送をもって同意したものとみなした。

またインタビューを実施するに当たっては、内容をすべて録音し、逐語録を作成することについて同意を得たうえで行うこととした。さらに、インタビュー中における中断や中止はいつでも可能であることを伝えるとともに、データは適切に管理することを説明した。データの分析に際しては、個人が特定されることのないよう個人名や団体名は伏せる形で記載を行った。

3. 結果

3.1. 分析対象者それぞれにおけるストーリーラインの概要と理論記述

SCATによる内容分析の結果、6名のストーリーラインと理論記述は、それぞれ以下の通りとなった。なお、本稿では紙幅の都合により、ストーリーラインは概要のみを記述することとする。

3.1.1 分析対象者A

(1) ストーリーラインの概要

73歳の男性であり、高齢者支援の仕事（ガイドヘルパー）に就いている。仕事柄、援助を受けることに対して抵抗はないものの、極力その立場にはならず、元気に長生きして病まずに死ぬことを理想としている。

幼少期から自助努力の求められる家庭環境にあったことや他人に頼ることを避けて、物事を独力で解決してきたこともあり、被援助経験に乏しい。終始、人間関係に起因する援助関係に対する欲求の低さや人間関係に価値を見出すことに対する困難、あるいは対人関係への期待の無さを述べているが、その背景には生来の人を信用しない姿勢と自助を理想とする考え方があるものと推察される。

(2) 理論記述

①職業経験が被援助志向性に影響を及ぼす。
②幼少期の家族環境が、その後の被援助志向性に影響を及ぼす。
③情緒的な援助関係の構築や友人などへの援助要請においては、人に対する基本的な信頼関係の有無やその程度が関連している。
④生来の性格と生育環境、現在までの経験の両方が、被援助志向性に影響を及ぼす。

3.1.2. 分析対象者B

(1) ストーリーラインの概要

68歳の女性であり、今日まで飲食業を続けてきたが、今年での廃業を決めている。3年前に、一緒に働き、晩年は介護をしていたパートナーと死別したが、友人や親族とは良好な関係を築いており、同時に互助的な関係となっている。

援助欲求は低く、施設利用も選択肢に入れている。その背景として、普段交流のない親族には頼れない、迷惑をかけたくないということを挙げている。自己決定を重視してきたこともあり、被援助経験に乏しく援助に対する欲求そのものは低いが、パートナーを介護した経験や介護サービスの実情を近くで見てきた経験から、援助に対する抵抗感はさほどない様子である。

(2) 理論記述

①身近な人の介護経験が、自身の援助に対する抵抗感を低減させる。
②迷惑を掛けたくないという考えが援助に対する欲

求を低める。
③被援助経験の乏しさは、援助に対する欲求そのものを低める。
④周囲との互助関係が、援助に対する抵抗感を低減させる。

3.1.3. 分析対象者 C
(1) ストーリーラインの概要
72 歳の男性であり、収入や人との関わりを維持するために就労を継続している。現状では援助の必要性を感じておらず、援助に対する欲求は低い状態にある。また援助拒否の傾向にあるともとれる発言が多く、援助に対する抵抗感も高い。
社会全体の他者依存傾向に対する否定的な感情を抱いている。また、自主自立の精神を重視する価値観のために被援助経験に乏しい。
自身の援助に対する考え方は性格に起因するものと捉えている様子であるが、宝石店経営という「他者からの援助を期待しづらい環境での生活」の中で物事を独力で解決してきたことや、盗難被害への懸念から常に警戒心を抱いていたことも現在の被援助志向性に影響を与えている可能性があると推察される。

(2) 理論記述
①職業経験が被援助志向性に影響を及ぼす影響について、当事者が自覚していないこともある。
②周囲の被援助者の援助者に対する態度や社会全体における他者依存の傾向が、個人の被援助志向性に影響を及ぼし得る。
③被援助経験の乏しさが、援助に対する抵抗感を生起させる。
④援助を受けることに対する態度のあり方を自分の性格に帰属させる傾向にある人がいる。

3.1.4. 分析対象者 D
(1) ストーリーラインの概要
74 歳の男性であり、民生委員としての活動や自治会における仕事に携わっている。区との協働による自治会活性化の取り組みにも関わるなど、周囲に広い交友関係を持ち、周囲からの援助要請にも進んで応諾している。
長男夫婦との密な交流があり、有事に際しては、すぐ近くに住む長男夫婦を頼りにしたいと考えている。最後は人に援助を求めることになると考えており、援助に対する抵抗感は低い。当人は普段からの民生委員としての取り組みが、援助を受けることへの抵抗感を低めていると自認している。

(2) 理論記述
①交友関係の広さや近所付き合いの充実が、援助に対する抵抗感を低減する。
②援助者としての経験が、援助を受けることへの抵抗感を低減する。
③日頃から密に交流している親類縁者を援助要請対象として想定する。
④援助者としての役割を持っていると、援助に対する抵抗感が低減する。

3.1.5. 分析対象者 E
(1) ストーリーラインの概要
65 歳の女性であり、昨年定年退職となった後、求職活動を行っている。人は互いに支え合うことができるという信条があり、友人や行政からの援助に対する抵抗感はない。ただし、自身の経験から「事情を考慮して援助を求めるべきである」とも考えており、友人などに相談が難しいことはまず身内に、さらに困難な内容は行政に相談するというスタンスを持っている。
援助を求めることによる羞恥や汚辱の心配はしておらず、世間体などを気にした言動をとる必要も感じてはいない。行政による求職支援サービスを利用中であり、求職支援に対する欲求が高まっている。困難を抱えた際は、他者に援助を求めて良いというのが基本的な姿勢である。

(2) 理論記述
①相互による助け合いの意識が、援助に対する抵抗感を低減する。
②世間体への懸念や援助を求めることそのものへの羞恥心などが、援助に対する抵抗感を強める。
③必要性に迫られることで、援助欲求は高まる。
④相談内容の程度によって、人は援助要請対象を取捨選択する。

3.1.6. 分析対象者 F

(1) ストーリーラインの概要

74 歳の男性であり、足に障害を抱えているほか、腎臓透析を受けている。親類縁者が亡くなって以降は、週 3 回訪れるヘルパーに買い物・掃除・洗濯・片付けといった家事全般を任せている。

生活保護と年金を受給中であり、家賃も区が負担するなど、専門職や行政機関からの援助を受けながら生活している状況にある。援助を受けて生活は安定しており、今後もこの生活を続けていきたいと考えている。

普段から生活圏に侵入されることに起因する援助に対する抵抗感を感じており、一方で援助を受けなくては生活が成り立たないという現実に対する葛藤がある。ヘルパーなどにあまり直接お礼を言うようなやりとりをしないものの、これまで多くの人から助けられながら生活してきたという認識を持っている。

(2) 理論記述

①援助内容に対する満足感や援助による生活の安定を経験することが、援助に対する欲求を高める。

②援助に対する抵抗感を持ちながらも、やむを得ず援助サービスを利用している場合には、その現状に対して葛藤を抱えている可能性がある。

③援助に対する肯定的な反応に乏しい高齢者が、必ずしも援助を受けることに否定的であるとはいえない。

4. 考察

4.1. 被援助志向性の 4 タイプ別にみる「援助に対する考え方」

(1) 援助に対する欲求「低群」・援助に対する抵抗感「低群」

高齢者用被援助志向性尺度の得点において援助に対する欲求と抵抗感のいずれも弱かった分析対象者 A と分析対象者 B（以下 A、B）のストーリーラインに着目すると、両者に共通する点として被援助経験に乏しく、自己決定や自助努力が求められる機会の多い中で生活してきたという背景が挙げられる。このことは、援助に対する欲求が生活環境による影響を受けることを示唆する結果であると考えられる。また A、B とも現在も就労を継続しており、そのために生活は比較的安定していることがインタビュー中の発言や質問紙調査への回答から推察される。そのために公的機関からの援助などを現状では特に必要としていないことも、公的な援助に対する欲求を低める要因となっている可能性が考えられる。

ただし A、B とも今後公的な援助に頼らざるを得ない状況になった際は、公的なサービスを利用するつもりがあるという趣旨の発言があり、公的な援助を受けることに対しては柔軟な考え方を持っている様子がうかがえる。A は日頃の職務経験上、援助サービスを利用しながら生活している高齢者を見ていることから、また B はパートナーを介護した経験や介護サービスの実情を近くで見てきた経験から、いずれも援助を受けることに抵抗はないと述べている。このことから、公的な援助に対する抵抗感もまた生活環境によって低減されるものと考えられる。

一方、友人などの親しい相手からの援助については A と B で考え方がかなり異なっていた。A は「他人に頼ることを避けてきた」と述べているが、その背景には「人間関係に価値を見出すことに対する困難、あるいは対人関係への期待の無さ」が一貫して語られており、それ故に親しい相手からの援助にそもそも期待しておらず、それ故に欲求も低い状態にあることがうかがえる。

それに対して B は、長年に渡り付き添ったパートナーと死別した後も、近隣に住む友人や親族と良好な関係を築いている。しかし、「普段交流のない親族には頼れない」、あるいは単に「迷惑をかけたくない」ということを理由に挙げており、親しい相手が周囲にいるにもかかわらず、そうした相手を対象として援助の欲求が高まることはないという趣旨の発言がみられた。

親しい相手からの援助について A と B の発言に共通してみられる特徴としては、相手から援助をしてもらうことそのものに抵抗があるということではなく、むしろ援助そのものに期待していない、あるいは相手に申し訳ないという気持ちが先に立つといったように、援助要請を行う相手に対する懸念を挙げている点である。このことが前述の「援助経験の乏しさ」に起因するものなのか、あるいは別の要因が存在するのかという点については、さらに検討が必要であろう。

以上より、A と B は援助に対する欲求と抵抗感のいずれも低い状態にあることが推察され、事前に回答した尺度における下位尺度得点とほぼ一致するものであったと考えられる。

(2) 援助に対する欲求「低群」・援助に対する抵抗感「高群」

高齢者用被援助志向性尺度の得点において援助に対する欲求が低く、援助に対する抵抗感が強かった分析対象者 C（以下 C）のストーリーラインに着目すると、A や B と同様に被援助経験に乏しく現在も就労を継続しており、現状では公的な援助の必要性を感じていない様子がうかがえる。また、現在の居住地に移り住んで間もないために友人などのネットワークに乏しいが、これまで住んでいた場所での人間関係のしがらみに苦慮していた旨の発言から、現状のパーソナル・ネットワークを拡大しようという意志も小さく、身近な相手からの援助に対する欲求も小さい状態にあるものと推察される。

一方で援助に対する抵抗感は強く、「人の世話になりたくない」といった発言からは援助拒否の傾向が感じられる。被災時の炊き出しに対する批判の声を耳にした経験などから社会全体の他者依存傾向に対する否定的な感情を抱いているほか、他者を頼りにしづらい環境で生活を続けていた影響が考えられるが、C 本人はあくまでも性格によるものと述べている。本人に自覚がないうちに、環境による影響を受けている可能性が推察される。

以上より、C は援助に対する欲求が低く、抵抗感の強い状態にあることが推察され、事前に回答した尺度における下位尺度得点とほぼ一致するものであったと考えられる。

(3) 援助に対する欲求「高群」・援助に対する抵抗感「低群」

高齢者用被援助志向性尺度の得点において援助に対する欲求が高く、援助に対する抵抗感が弱かった分析対象者 D と分析対象者 E（以下 D､E）のストーリーラインに着目すると、両者に共通する点として、日頃からサービスの利用や協働といった形で公的機関との関係を持っているという点が挙げられる。また D、E とも今後も関係を継続していく意向があり、そうした援助に対するニーズも高い状態にあるものと考えられる。また、交友関係が広く、友人同士の互助的な関係を重視している点や、頼りにできる親類縁者が近くに住んでいるという点も D、E に共通しており、有事にはそうした相手に援助を求めたいという考えを持っていると推察される。

一方援助に対する抵抗感について、D は「所属する自治会における民生委員としての取り組みや、そこでの互助的な関係性の構築」が援助を受けることへの抵抗感を低めていると述べているのに対して、E は世間体への懸念や援助を求めることそのものへの羞恥心などがないと述べている。この両者の発言内容は、いずれも「困難を抱えた際は、他者に援助を求めて良い」という考え方が背景にある点が共通しているものと推察できよう。

以上より、D、E は援助に対する欲求が高く、抵抗感の弱い状態にあることが推察され、事前に回答した尺度における下位尺度得点とほぼ一致するものであったと考えられる。

(4) 援助に対する欲求「高群」・援助に対する抵抗感「高群」

高齢者用被援助志向性尺度の得点において援助に対する欲求と抵抗感がいずれも強かった分析対象者 F（以下 F）のストーリーラインに着目すると、足の障害や腎臓透析などのために生活の多くをヘルパーに依存する状態にあり、生活保護と年金を受給、家賃も区が負担するなどの状況にある。現在の生活の安定は専門職や行政機関からの援助無しには考えられず、F はこの生活を続けていきたいと述べるなど、公的機関からの援助に対する欲求は高い。また、家族との死別後には孤独感が強まり、地区の民生委員児童委員協議会（民児協）が提供する昼食会に、参加者との会話の機会を求めて参加するなど、身近な人からの援助に対する欲求も高まっていることがうかがえる。

一方で、公的サービス利用を開始した当初から、生活圏に侵入されることに起因する援助に対する抵抗感を感じている趣旨の発言がみられることから、F は援助に対する欲求が高く、抵抗感の強い状態にあることが推察され、事前に回答した尺度における下位尺度得点とほぼ一致するものであったと考えられ

る。さらに、「生活上の必要性」に由来する援助に対する欲求と、「生活圏に他者が入り込むこと」に由来する抵抗感の間で葛藤を抱えている状態にある可能性も考えられる。

4.2. 理論記述からの総合的考察

分析対象者6名のインタビューデータを用いてSCATによる理論記述を行った結果、いずれの対象者においても、現在に至るまでの生活環境が援助に対する欲求および抵抗感に大きく影響を及ぼすことが示唆された。具体的には職業経験（A、C、E）や互助的なつながり(B、D、E)、公的サービスの利用(B、E、F)などが挙げられており、現在における被援助志向性がこれまでの個々人の経験に裏打ちされたものであることが推察できよう（表3）。

またA、B、Cによる発言から、被援助経験に乏しいことが援助に対する欲求を低減させることも示唆された。いずれの対象者においても、自主自立の精神が背景にある旨の発言がみられており、他者に頼らない独力での問題解決を行ってきた結果であると考えられる。さらに、Fのように援助に対する欲求と援助に対する抵抗感のいずれも高い場合には、他の3タイプと違い個人内で欲求と抵抗感の間に認知的不協和が生じ、それによる葛藤を抱えている可能性があることも示された。

また発言内容を整理した結果から、分析対象者6名における高齢者用被援助志向性尺度の下位尺度得点の高低（表1）と、ライフイベントから判断された実際の「援助に対する欲求」の多寡および「援助に対する抵抗感」の強弱との関係の間に齟齬はなく、Takahashi et. al.（2017）の高齢者用被援助志向性尺度の妥当性を質的な観点から支持するものであるとも考えられる。

表3　発言のみられた具体的なライフイベントと被援助志向性との関係

調査協力者	援助に対する欲求（尺度得点高・低群）	援助に対する抵抗感（尺度得点高・低群）	影響を受けた旨の発言がみられた具体的なライフイベント
A	低	低	職業経験（高齢者支援）、自助努力による問題解決の経験
B	低	低	パートナーの介護と死別、公的サービス（介護）の利用経験
C	低	高	職業経験（宝石店経営）、他者依存への否定的感情の生起
D	高	低	地域活動（民生委員・自治会）、家族や周囲との親密な交流
E	高	低	公的サービス（求職活動支援）の利用経験
F	高	高	公的サービス（生活保護）利用経験、専門職による生活支援

本研究では、分析対象者6名のインタビューデータを分析し、高齢期の被援助志向性に影響を与えるライフイベントについて、発言内容から具体的な検討を行った。その結果、(1) 援助職や小売業といった職業経験が肯定的、あるいは否定的な被援助志向性を形成する要因となり得ることや、(2) 身近な人との互助性を伴うつながりが肯定的な被援助志向性を形成する要因となり得ること、(3) 自身や家族の健康、あるいは経済上の変化に伴う公的サービス（介護サービスや生活保護、求職支援など）の利用経験そのものが、特に公的サービスに対する肯定的な被援助志向性を形成する要因となり得ることが示された。なお、今回分析を通して明らかになった6名それぞれの被援助志向性も、やはり今後生じる新たなライフイベントによる影響を受ける可能性があるものと推察される。

本研究は、日本学術振興会科学研究費助成事業（基盤研究C：「被援助志向性が低い高齢者への支援方略に関する研究」、課題番号：26380671、研究代表者：安藤孝敏）の助成を受けて行われた。

文献

安藤孝敏・小池高史・高橋知也 (2016). 都市部のひとり暮らし高齢者における孤独感の関連要因. 横浜国立大学教育人間科学部紀要. III, 社会科学, 18, 1-9.

安藤孝敏・高橋知也・小池高史 (2017). 高齢者の被援助志向性 ～援助を求めること・受けることに対する認知的枠組みを把握する尺度の作成～. 地域ケアリング, 19(12), 47-49.

Holmes, T. H., & Rahe, R. H. (1967). The Social Readjustment Rating Scale. Journal of Psychosomatic Research. 11, 213-218.

水野治久・石隈利紀 (1999). 被援助志向性、被援助行動に関する研究の動向 教育心理学研究. 47, 530-539.

小川栄二・三浦ふたば・中島裕彦 (2009). 利用者の援助拒否・社会的孤立・潜在化問題から福祉労働のあり方を考える. 総合社会福祉研究, 34, 28-40.

大谷 尚 (2007). 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 ―着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き― 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 教育科学, 54(2), 27-44.

大谷 尚 (2011). SCAT : Steps for coding and Theorization ―明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法― 感性工学, 10, 155-160.

高橋知也・小池高史・安藤孝敏 (2014). 団地に暮らす独居高齢者の被援助志向性 ―横浜市公田町団地における調査から―. 技術マネジメント研究, 13, 47-55.

高橋知也・小池高史・安藤孝敏 (2015). 高齢者は誰に援助を求めるか ―高齢者における被援助志向性と援助要請を行う対象との関連の検討から―. 技術マネジメント研究, 14, 23-31.

Takahashi, T., Koike, T., Ando, T. (2017). Development of the Help-seeking Preference Scale for Elderly. The 21st IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics.

田村修一・石隈利紀 (2006). 中学校教師の被援助志向性に関する研究 ―状態・特性被援助志向性尺度の作成および信頼性と妥当性の検討. 教育心理学研究, 54, 75-89.